武蔵野幕屋　日曜聖書講筵

神の熱愛

――ヤコブ書第４章、５章――

１９５７年６月２日
小池辰雄

自分の欲心　神の生命が生きる　共存共栄　信仰は観念でも御利益でもない　祈りの後の実存
創造も救済も神の愛の仕事　熱愛の神　極みまでの愛　霊魂が神に手を延ばすか延ばさないか
キリストが神の熱愛の具体的な現われ　絶信の信　無は即ち無限　祈りが聴かれたあとの実存
が大事　ヤコブ書の総括　祈り

【ヤコブ４】

1 汝等のうちの戦争は何処よりか、分争は何処よりか、汝らの肢体のうちに戦う慾より来るにあらずや。2 汝ら貪れども得ず、殺すことをなし、妬むことを為れども得ること能わず、汝らは争いまた戦す。汝らの得ざるは求めざるに因りてなり。3 汝ら求めてなお受けざるは慾のために費さんとて妄に求むるが故なり。4 姦淫をおこなう者よ、世の友となるは、神に敵するなるを知らぬか、誰にても世の友とならんと欲する者は、己を神の敵とするなり。5 聖書に『神は我らの衷に住ませ給いし霊を、妬むほどに慕いたもう』と云えるを虚しきことと汝ら思うか。6 神は更に大なる恩恵を賜う。されば言う『神は高ぶる者を拒ぎ、へりくだる者に恩恵を与え給う』と。7 この故に汝ら神に服え、悪魔に立ち向え、さらば彼なんじらを逃げ去らん。8 神に近づけ、さらば神なんじらに近づき給わん。罪人よ、手を浄めよ、二心の者よ、心を潔よくせよ。9 なんじら悩め、悲しめ、泣け、なんじらの笑いを悲歎に、なんじらの歓喜を憂いに易えよ。10 主の前に己を卑うせよ、然らば主なんじらを高うし給わん。

11 兄弟よ、互に謗るな。兄弟を謗る者、兄弟を審く者は、これ律法を誹り、律法を審くなり。汝もし律法を審かば、律法をおこなう者にあらずして審判人なり。12 立法者また審判者は唯一人にして、救うことをも滅ぼすことをも為し得るなり。なんじ誰なれば隣を審くか。

13 聴け『われら今日もしくは明日それがしの町に往きて、一年の間かしこに留り、売買して利を得ん』と言う者よ、14 汝らは明日のことを知らず、汝らの生命は何ぞ、暫く現れて遂に消ゆる霧なり。15 汝等その言うところに易

えて『主の御意ならば、我ら活きて此のこと、或は彼のことを為さん』と言うべきなり。16されど今なんじらは高ぶりて誇る、斯くのごとき誇はみな悪しきなり。17人善を行うことを知りて、之を行わぬは罪なり。

【ヤコブ5】

1聴け、富める者よ、なんじらの上に来らんとする艱難のために泣きさけべ。2汝らの財は朽ち、汝らの衣は蠹み、3汝らの金銀は錆びたり。この錆なんじらに対いて証をなし、かつ火のごとく汝らの肉を蝕わん。汝等この末の世に在りてなお財を蓄えたり。4視よ、汝等がその畑を刈り入れたる労動人に払わざりし値は叫び、その刈りし者の呼声は万軍の主の耳に入れり。5汝らは地にて奢り楽しみ、屠らるる日に在りて尚おのが心を飽かせり。6汝らは正しき者を罪に定め、且これを殺せり、彼は汝らに抵抗することなし。

7兄弟よ、主の来り給うまで耐え忍べ。視よ、農夫は地の貴き実を、前と後との雨を得るまで耐え忍びて待つなり。8汝らも耐え忍べ、なんじらの心を堅うせよ。主の来り給うこと近づきたればなり。9兄弟よ、互に怨言をいうな、恐らくは審かれん。視よ、審判主、門の前に立ちたもう。10兄弟よ、主の名によりて語りし預言者たちを苦難と耐忍との模範とせよ。11視よ、我らは忍ぶ者を幸福なりと思う。なんじらヨブの忍耐を聞けり、主の彼に成し給いし果を見たり、即ち主は慈悲ふかく、かつ憐憫あるものなり。

12わが兄弟よ、何事よりも先づ誓うな、或は天、あるいは地、あるいは其の他のものを指して誓うな。只なんじら然りは然り否は否とせよ、罪に定めらるる事なからん為なり。

13汝等のうち苦しむ者あるか、その人、祈せよ。喜ぶ者あるか、その人、讃美せよ。14汝等のうち病める者あるか、その人、教会の長老たちを招け。彼らは主の名により其の人に油をぬりて祈るべし。15さらば信仰の祈は病める者を救わん、主かれを起し給わん、もし罪を犯しし事あらば赦されん。16この故に互に罪を言い表し、かつ癒されんために相互に祈れ、正しき人の祈ははたらきて大なる力あり。17エリヤは我らと同じ情をもてる人なるに、雨降らざることを切に祈りしかば、三年六ヶ月のあいだ地に雨降らざりき。18かくて再び祈りたれば、天雨を降らし、地その果を生ぜり。

19わが兄弟よ、汝等のうち真理より迷う者あらんに、誰か之を引回さば、20その人は知れ、罪人をその迷える道より引回す者は、かれの霊魂を死より救い、多くの罪を掩うことを。

●自分の欲心

今日はヤコブ書4章ですが、あるいは5章まで貫いてやってしまうかも知れません。

1汝等のうちの戦争は何処よりか、分争は何処よりか、汝らの肢体のうちに戦う慾より来るにあらずや。

この「戦争」という字は正に戦争で、「分争」の方はもし普通の戦争でいうならば、どこどこの合戦、戦争の中の小さな戦いがこの「分争」という字に当たります。大にしては国際的な戦争、民族間の戦争、小にしては国内間のいろんな争い、この場合はまた、社会的ないろんな紛争、いろんな意味を含めて言っているわけです。

それは結局、どこから発しているかというと、我々の身の中にあって闘うところの慾から来ている。ヨブ記に「骨の中に戦闘のあるあり」という言葉がある。ヨブ記33章19節、

「人床にありて疼痛に攻られ その骨の中に絶ず戦闘のあるあり」（ヨブ33・19）

これは主として病のたたかいの方でしょうけれども、

「城を陥れるよりも自分の心中の敵に勝つ方が更に勇者である」

という言葉が東西にある通り、問題は外にあるのでなくて、我々人間の一切の問題は我々の中にある。個人の中にあるわけです、個体の中に。これはもう人間の歴史を通して、終末に至るまで一切の問題は実は、我々個体の中にある。

「慾」という言葉は、簡単にいえば、欲することですね。欲する心は「慾」と書く。これを一つにすると「慾」という字になる。欲心。欲する心はなにも悪くはない。我々はいろんな欲望を持っているわけです。欲望とか欲求とかいう。

生命体、生きものというのは、生命体の一番の根本衝動は、生きようとする欲求です。これは生命というものが生命しようとするんですから、生きようとする欲求が一番、根本衝動です。こういう世の中では、生存競争なんてのが段々激しいわけです。小さなそこらの虫、昆虫から、獣から、植物もそうです。生きとし生けるものはみな生きんとする欲求を持っている。

生命は、生きようとする欲求の、即ち心の――心といっても魂といってもいいですが――根本衝動であり、根本の事態であるところの「心」とか、「魂」とかいう問題が、一番どうもおろそかになっているのが一般の状態です。だから、全ての問題が根源的な展開をしていかない。いつまで経っても渦を巻いて、グルグル、ガタガタやっているというわけです。

生きんとする心、欲心、それは悪くはない。それでは一体どうして、どういう時にそれが争いになり、終いには戦争になるような事態になるか。下手すれば、20世紀の後半においては、原爆、水爆でもって人類は自滅しようとしている。

「相手の欲求はけしからん！　俺たちの方が正しいんだ」

と。戦争とか、平和とか、何とか言って、争っているのはみんな自分の方が正しいと思っているからです。また、自分の勢力をもって、自分の考えや行き方を邪魔するものを倒し

ていこうとする。これが国際間における戦争です。一切の人間の、小から大に至るまでの食い違い、争いはみんなそこから来ている。

「自分」というやつ、自分の心、自分の欲心というものを、この個体というものを自分と自覚するわけです。それを主張するのが「自己主張」というやつ。もう国際関係もみんなこれは自己主張です。それが仕方がないから、ある協定でもって多少そこのところを協定しようとして、いい加減な誤魔化しをやっているだけのはなしです。

大国の大政治家が、本当に世界を平和にしようじゃないかと言って、腸（はらわた）をうち割って相い語っているか。決してそうではない。それならばもっと政治は、本当に明るい積極的な「和」というものがあるはずですが、それがない。片一方では、一生懸命で弾薬、武器、食糧の蓄積だとか、あるいは地下に飛行場を造ったり、だましあいをしては、後の方では盛んに準備をしている。

それは結局、自己主張なんです。自分の欲心を、それ自体を絶対化し正しいとして、そして自己を主張しようとしている。だから、ヤコブが言う通り、

「汝らの肢体（したい）のうちに戦う慾（よく）より来（きた）るにあらずや」

という。

●神の生命が生きる

私たちのこの生命というものは実は、生命の根源、根源生命であるところの神から由来しているというところに、新しく気が付くまではダメなんです。私たちの生命、根源生命が神に与えられたところの生命である。これは私することのできない生命である、ということに気がつくかどうか。これは気がつかないです、

「そんなのは神話だ。神様なんてのはどこにあるか」

というわけで、大いに自分を善しとし、自分の考えを絶対化している。まぁやってみたらいいです。たくさんいます、そういう人たちは。それでもって本当の意味において正しいところにいくか、「和」の世界がそれで展開していくか、やってみたらいい。

事実やってみている。歴史はそれをやって、しょっちゅうそいつが暗礁に乗りあげては、戦争、戦争、争い、争いを繰り返している。これはやっているんです、

「神様がいるの、いないの」

と、今始めた議論でも何でもない。

「事実、神様を否定してやってみたらば、世界の歴史はこんな始末であります」

ということなんです。誰でも一人ひとりに、

「あなたは戦争が好きか、水爆でもって世界は自滅していいか？」

と聞いてみて、

「ああ、それでいい」

なんて言う人はいないわけです。それでありながら、どういうもんだか知らんが、ある魔的な力によって国家というものは動いている。社会というものは動いている。また、個人も実はそういって否定しながら、ある隠れた力によって操られている。これが我々の魂がサタンに売られているということ。

「罪の下に虜となっている」

と、パウロが言う。サタンに縛せられているというわけです。

キリストは、一番闘ったのは何かというと、この勢力と戦ったんです。荒野の試誘というのはこのことです。神に属するか、サタンに属するか。

「私を拝め。そうしたら全世界をやるぞ」

「サタンよ、退け！　主たる汝の神を拝するだけである」

とキリストは応えた。お伽話でも神話でもない。最も真剣な事態なんです。キリストは自分の存在を神において在る存在、神に委ねられたる生命、神によって与えられたる生活、導かれている生活であると自覚されていた。そういうように個体というものを、神に直結しているものとして自覚する。そこから問題は始まるわけです。

だから、生きる者は、生きんと欲する心、それ自体は結構なんですが、その生きんと欲する心は一体、生きるということは、何が生きるのか。そこにおいて、

「神の生命が生きる」

という心です。そこにおいて「神の生命が生きん」という心が、本当にその時に――それをもし欲心というならば、それは非常に結構なことなんです――神の生命をしてそこに生かしめている。神の生命が「我」において生きている。それならば、人においても神の生命が生きていくのであって、同じくその個体というものは、神の生命が生きている。神の生命が生命しようとしている。神の生命が生きようとしていることは、神の栄光がそこに現われようとしている。互いに神の栄光を尊重するところには、もはや争いということは、考えようとしても考えられないことになる。

●共存共栄

「共存共栄」という素晴らしい言葉がある。共存共栄という。今ごろ誰もこんなことは言わない。大東亜戦争〔註：太平洋戦争の日本での呼び名。植民地として欧米に搾取され続けていたアジアを開放し、独立させる事を名目とした〕の時に、日本は東洋において共存共栄しようとした。言葉はうるわしい。しかし、中味が問題。何によって本当に共存共栄するんだか、「八紘一宇」なんて言って。これも素晴らしい言葉です。四方八方は一つの家におけるが如し、即ち、四海同邦、大きな家庭であると。ところが、言葉ばっかりで、八紘一宇の主となるものが立っていない。共存共栄するところの主体が立っていない。何において共存共栄するのか。何において八紘一宇なのであるか。その時に、

「日本によって共存共栄できる、日本によって八紘一宇だ」なんて、とんでもない話です。自己というものを絶対化したから、日本は神様に審かれた。それは神様に審かれます。

それが神において八紘一宇ならば、私たちは神の家においての兄弟姉妹であり、また互いに僕（しもべ）として仕えるという、そういう角度です。愛の荷を負うということです。口先だけじゃダメです、本当にそれに生きなければ。そういう共存共栄、八紘一宇も、聖書の光に照らされれば、素晴らしい言葉なんです。ところが、一番大事なものがお留守になっていて、自己を絶対化してしまったから、とんでもない話になった。

自己を自己として立てていこうとするのが、慾というやつです。神様の生命がそこにおいて展開せんとして、本当に神のものとして自覚しているときには、それはもはやいわゆる慾ではない。それは生命の本当の根源の衝動として展開していくことになる。それはすっかり祝福された角度になってしまう。同じ生きるという事態が、方向と質が変わって行くわけです。

2 汝ら貪（むさぼ）れども得ず、殺すことをなし、妬（ねた）むことを為（す）れども得ること能わず、汝らは争いまた戦（いくさ）す。

そこでちょっといっぺん切れるわけです。

汝らの得ざるは求めざるに因りてなり。3 汝ら求めてなお受けざるは慾のために費さんとて妄（みだり）に求むるが故なり。

「得ざるは求めざるに因る」という。

「求めよ、さらば与えられん」

というのに、求めないから得ない。

求めてなお受けざるは慾のために費さんとて」

求めることが慾によるところの求めだったらば、これはダメですよ。即ち、さっきの「欲求」の方なんです、いわゆる悪い意味においての。普通、欲求ということは悪い意味じゃないですよ。けれども、慾の求めになったら、これはダメなんです。

これは何を求めるか。求めることの求めは、祈り求めるという、この祈りという角度がないからです。しかも、慾のために祈ったって、これはダメです。それは御利益（ごりやく）です。御利益の祈りはダメです。

●信仰は観念でも御利益でもない

霊の世界というものは、これは警戒しないといかんですよ。慾のために祈っても、その祈りがある意味において、熱心であると、魂が非常に分裂がないと、慾のために祈った祈りも聴かれることがいくらもある。けれども、その祈りが聴かれたと思っても、そいつは実は、神様に聴かれているのではない。別な勢力に聴かれている。別な霊的なものに聴か

れている。そうすると、それでもって大いに感謝しても、それ自体の現象（すがた）は良さそうでも、それは御利益で危険です。自分の慾というものが満ちていることによって感謝しているようなやり方は、本当は神様を相手にしているのではなく、何か別な霊を相手にしている事態なんです。それで、皆さん、そこは間違っては困る。

「祈ったら聴かれました」

なんて、そんなに簡単にはいかない。宗教は、現象面では類似した現象が起きても、その質が違うということはいくらでもあるので、その質の違うことをしっかりと自覚して、また、見分けなくてはいかん。その自覚と見分けをする準備は何か。それはどこまでも主イエス・キリストが立っていないところではダメなんです。主イエス・キリストの立っていない時に、ただいきなり「神」といっても、そいつは危ない。

「我によらでは父に至ることができない」

即ち、キリストによることなくして、キリストの執成（とりな）しなく、キリストに依り頼むことのない祈りというものは、父に至らない。だから、

「聖名（みな）によりて」

ということは決していい加減なことではない。私たちの祈りのあとで、

「聖名によりて聴きあげ給え」

と言うとき、その「聖名によって」ということが、刺身のつまみたいに、「聖名によって」なんて勝手につけ加えたって、それはダメですよ。さんざん欲心の祈りをしておいて、終りの方へきて、「聖名によって」なんて、それは虫がよすぎますよ。

「聖名によって」と終りにおいてしめくくるためには、本当に聖名に在って全てが祈られていなければダメです。聖名に在って祈られていることは、聖名を立てていることであって、キリストの名を立てているのであって、私たちを立てていることではない。

さきほど、讃美歌で歌いました。

「聖意を成させ給え」

「導き給え」

と。即ち、キリストに在ってキリストの欲し給い、喜び給うところのもの、神に栄光が帰せられるところのもの。そういうように私たちの祈りが、究極においてはキリストを受けとり、神を受けとっていく、神が現成（あらわ）れていくという祈りが大切です。たとえそれが病の癒（い）えることを祈ることにしても、あるいは事業の成功することを祈るにしても、あるいは学問が展開することを祈るにしても、皆さん、何を祈ってもいいです。その切実な願いを祈ってください。病に罹っている人は病の癒えることを祈ってください、一生懸命に。けれども、それがただ病が癒えて、

「めでたし、めでたし」

というような角度の祈りだったら、同じく病の癒えることを祈っても、それは本当の祝福

に入らない。

「私は貴神の所有です！　私は貴神の所有であって、貴神の素晴らしい生命にキズが付いている。この生命に虫が喰っている。どうか、これを貴神の素晴らしい健全なる生命として、貴神の栄光の現われる器としてください」

という角度の祈りですよ。たとえ、そういう言葉を口に出そうが出すまいが、それはいいです。その魂の自覚がその角度にあって祈っているならば、その祈りは必ず聴かれる。聴かれるし、必ず祝福される。

「さぁ、この祈りは聴かれるだろうか？」

ではいかんですよ。神様は、神様の栄光が十全に現われんことを欲しておられるんですから、それが傷つけられているときには、それが癒されることが神の聖意であるに相違ないんです。これは完全に自己を投げ出して、神を立てている祈りですから、必ず聴かれる。それに対する確信がなかったらダメです。ところが、それが欲心、慾だというと、

「さぁ、本当に癒るだろうか？　癒ったら今度はどうしよう、こうしよう」

というような自分の慾を考えていたらダメです。その為にまた熱心に祈る祈り方もあるでしょう。それで、偶々聴かれることもあるでしょう。しかしそれは宗教の霊の事態において、何か別な働きがかかっている。だから私が、

「信仰は観念でもなければ、御利益でもない」

と言うのは、そういう意味においてです。

●祈りの後の実存

本当に霊的な祈りということは――話がもう第5章の方にまで移ってしまいますけれども――5章の終りの方の13節から、

「13 **汝等のうち苦しむ者あるか、その人、祈せよ。喜ぶ者あるか、その人、讃美せよ。** 14 **汝等のうち病める者あるか、その人、教会の長老たちを招け。彼らは主の名により其の人に油をぬりて祈るべし。**

ここに「主の名によりて其の人に油をぬりて祈る」とあります。当時、祈るときには油をぬって祈ることは習慣だった。何も今、外側のことを真似する必要はないですよ。

15 **さらば信仰の祈は病める者を救わん、主かれを起こし給わん、もし罪を犯しし事あらば赦されん。** 16 **この故に互に**

いいですか、互いに、

罪を言い表し、かつ癒されんために相互に祈れ、

別に牧師さんがいるわけじゃない。皆さん、互いに祈りなさい。ルターが、

「クリスチャンは全てどのクリスチャンも祭司である」

と言ったのはやっぱりこういう角度です。互いに執り成して祈りなさいということ。

正しき人の祈ははたらきて大(おおい)なる力あり。

神様に対して義しい関係にある魂の祈りは力がある。神様に対して関係が義しくない人の祈りは力がない。これは事実が証明する。

17 **エリヤは我らと同じ情をもてる人なるに、雨降らざることを切に祈りしかば、三年六ヶ月のあいだ地に雨降らざりき。18 かくて再び祈りたれば、天雨を降らし、地その果(み)を生ぜり。」（ヤコブ５・13～18）**

というあのエリヤの祈りのことが出てきます。切に祈るというのは、ヘブライ語の言い方では「祈りを祈る」という言い方です。

祈りは即ち、御霊の祈りです。御霊に在っての、キリストに在っての祈りです。キリストの聖意(みこころ)に即する祈りをしていく。お願いごとがあれば、何をお願いしてもいい。しかし、それがみんな自己を立てていてはいかん。キリストの生命の現われとして、キリストの真理の現われとなるように、神の栄光の現われるという、この根本自覚において祈る。

いやもう実に、自分の実存がそういう角度になっていると、もう祈りはそういう角度に自然になるんです。またそれでなければ、祈りにならないことを自分で知る。自己を立てている祈りには本当の力はこない。これはやってみると――試験ではないですが――あなた方の魂に聞いてみればわかる。本当に自分が投げ出されている祈りならば、これは本当に上から力がくる。キリストを立てている祈りは能力(ちから)がくる。

それは実に自分において切実な、

「どうしても肺病が癒(なお)りたい。この肺病はどうしても癒りたい。そして、如何にもして、神様の、キリストの御用に立ちたい」

と。そのためには真剣に祈っていい。

「病気であることが直ちに聖意である」

なんて、すましているような、そんなことはどこにも書いてない。キリストは、

「よし、お前の病は癒されないでいい、癒らないでいい。それは聖意の現われである」

なんてどこにもキリストは福音書で言っておられない。キリストは、求めている者をすべて憐れんで医(いや)してくださった。それは神様の栄光です。

しかしながら、神様に栄光を帰さないような人たちは、いくら癒されても、これは祝福にあずからなかった。信仰に入らなかった。事実。それはたくさんいますよ。十人の癩病人を癒した時に、たった一人が帰ってきて、神に献げ物をして讃美したという〔ルカ17・11～19〕。

「外(ほか)の者はどうしたかね？」

とキリストが訊(き)かれたところがあるでしょ。祈りが聴かれて――献げ物の「物」というのはその時にその人の心を現わしたので、物が問題ではない――感謝の意を神にその生涯をもって現わすことが大事なんです。祈りのあとの、祈りが聴かれたあとの大事なことは、

その人が本当に神に在って、キリストに在って実存することです。キリストにおけるこの実存が現われなかったら、その祈りは聴かれても、あとで逆戻りしますよ。そうすると、

「ああ、あの時はせっかく聴かれたけれども、ダメになってしまった。あれは、あんな祈りはやっぱり本当ではなかったか」

なんて思うけれども、そうじゃない。自分の今の実存が本当でないからなんです。霊的な恵みにあずかって、そして、なんのかんのと外の人に言われて、あとから、

「そうか、やっぱりあれは本当じゃなかったのかな？」

なんていって、観念の人たちに理屈でもって言われて、動揺する人がある。ダメですよ、それでは。本当に神の恵みを栄光の現われとして受けとっていくならば、いよいよその人は、その実存において正しい立派な歩き方をしていくわけでしょ。

いわゆる「霊的」といって浮いてしまって、責任ある生活のできないような人は結局、ダメになる。どういう意味におきましても、どこから突っつかれても、

「汝らの義、学者パリサイ人に勝らずば」

とキリストが言われたのは、私たちの実存の現われというものは、実に弾力性のある、また多面的なものとして、渾然一体となって、如何なる事態にでも現われていくというような角度でなければ、本当に救われているという確かさをそこに実証していることではないわけです。

どうか、そういうわけで、祈りにおいて勿論、真剣で深くあると同時に、その後の実存がまた祈りを呼吸して実存していかなければ、

「栄光より栄光に至りて遂にキリストの像に化するなり」

なんてことは思いもよらないことになってしまう。

●創造も救済も神の愛の仕事

それが、その「求めよ」というところから、つい第5章の方までいってしまいましたけれども、まぁ仕方がない。４章に戻ります。

3 **汝ら求めてなお受けざるは慾のために費さんとて妄に求むるが故なり。**

この「妄に」という語はギリシャ語で「カクオス」という字で、「悪しく求める」で、求め方が悪い。即ち、自己本位であるのは、求め方が悪いんです。神の栄光を求めていないわけです。

4 **姦淫をおこなう者よ、世の友となるは、神に敵するなるを知らぬか、**

「姦淫」というのは宗教的な姦淫の意味で、信仰がキリストから脱落して、他の方へ行くことを「姦淫」という。

誰にても世の友とならんと欲する者は、己を神の敵とするなり。

即ち、「偶像」ですね。我々人間は、それが学問であろうと、芸術であろうと、事業であ

ろうと、何であろうと、それ自体を絶対化していけば、それは偶像になる。人間の作るものはみんな偶像になる。即ち、「神を拝する」という根本的角度なくして、何をしようとも、そのものに囚われてしまう。それは即ち、姦淫である。それは神の敵となる。

太陽の光を受けて、あそこに薔薇の花がたくさん咲いています（庭の薔薇を指される）。太陽の光という栄光を現わしているのがこの花の姿であるように、私たちもその営むものが何であっても、これは神様の――その人が歌を歌う人であろうと、絵を描く人であろうと、畑を耕す人であろうと、あるいは政治的なことをする人であろうと、学問をする人であろうと、何であろうとも――それは根本的な意味においては、神の栄光の現われとして――何もそれを註釈づけることはないが――もうちゃんと自分の中でそれが溶けてしまって、そして現われていく。そういう角度であるときに、本当にその人の魂の在り方には落ち着きがある。そして、あせりがない。そこに何か知らんけれども、根本的な泉が源泉から来ているんですから、外のものと違った光を発する。奥ゆかしさが出てくる。

私たちは、決してこれは付け焼き刃でも、後から解釈づけることでも、何でもなくて、根本的にその角度にならなければ、事実、本ものが出てこないということを、身をもって、皆さん、証していただきたい。これは議論の世界ではない。解釈する世界ではない。

「私がこれをこう解釈する」

ということではない。解釈学ではない。もし言うならば、告白学さ。私たちの存在をもってそれを告白し、事実をもって証明し、身証告白していく世界です。身をもって証し、あと、人がどう言おうと、そんなことはいいですよ。

「この徒輩（ともがら）、黙（もだ）さば石叫ぶべし」

これは私の大好きな聖言です。私はこの言葉を瞑想していたらば、

「ははぁー、石というのは実はキリストであった」

ということに、昨日の晩に気がついた。なるほど路傍の石も、神様は叫ばせるだろう。本当に真理を叫んでいる人たちが、その真理をもって身証（あかし）していった人たちが、世に認められない。それでも結構です。けれども、神様の国はそういった人たちによって実現していく。本ものが現わしていくものは、その時の瞬間に――

「キラキラ輝くものは瞬間のために生まれ、本当のものは後世にまで失われずに留まっている」

と、ゲーテの『ファウスト』の中の言葉があるが――それどころじゃない。これは世の末にまで留まって、

「誰も言うものがなければ、福音は石を通しても叫ぶぞ」

というのです。その石は実はキリストである。

そういうように、神の敵となったら、どんなに栄えてもダメになる。けれども、何も私たちは世とすぐ喧嘩する必要はない。キリストも「世と喧嘩しよう」というのではない。

「**神は世を愛し給えり。その独子（ひとりご）を賜うほどに世を愛し給えり**」と書いてある。「世を愛し給えり」とは、サタンの勢力から世というものを光の世界に変えようとして、神様は世を愛したので、それを直接に愛しているのではない。

「ああ、お前たち、よしよし」

なんて、ただ愛しているのではないですよ、神様の愛は。「世を愛している」というのは世を、サタン・罪・暗黒・邪曲・争いの世を神様は何故愛するかというと、それを本当に光に、平和に変えようとして愛しているんです。神様の愛は、相手がダメなら、それをダメでないものにしようとして、愛するのが神の愛です。相手が素晴らしいからといって、愛するのではない。相手がダメだから、いよいよもってそれを素晴らしいものにしてやろうとするのが、神の創造的な愛です。救済の愛です。創造も救済も、これはみんな神様の愛の仕事です。

だから、私たちが本当に神の味方となったらば、もう敵はいない。天下無敵なんです。神がキリストを通して世を愛し給うたように、世を直接に愛してはいけないから、

「**世を愛するな。世を愛すれば、神を愛する愛はない**」

とキリストも言った。それは世を直接に愛すればそうさ。けれども、世というものを本当に救おうとする愛ならば、これは神様の本当の愛なんです。それだから、天下無敵、何ものをも私たちは愛するんです。その愛するというのは、本当に相手を救い上げる愛。なにも倒すのではない。救い上げる愛。また直接に「よし、よし」なんてただ言っているのではない。そういう愛が、今、我々が段々ここに臨んでいこうとするところの愛です。

「**誰にても世の友とならんと欲する者は、己を神の敵とするなり**」

と。直接に世の友となったならば、それは神の敵になる。けれども、神様と本当に一つになるならば、今度は、その世をサタンの勢力からすっかり神の勢力に変えようとするその愛が出てくるんです。いいですか。

●熱愛の神

5 **聖書に『神は我らの衷（うち）に住ませ給いし霊を、妬むほどに慕いたもう』と**

という不思議な引用句がある。これは旧約聖書にこの通りの引用句はない。ないけれども、ヤコブが旧約聖書の精神を掴まえて、こう言った。また、別の何か言い伝えがあって、その言い伝えの言葉を多分ここに引用したのだろうという、学者の説は多分正しいでしょう。けれども、言い伝えがあってそれを引用しようが、とにかく、これは旧約聖書のある大事な角度を現わしている、ということは言えると思う。

この「妬む」という言葉は、ここでは「ゼロス」という語ではない。普通、「ゼーロス」という語が「妬む」という言葉で、例えばコリント前書13章の、

「**愛は妬まず**」

という、あれは「ゼーロス」という字ですが、ここでは「フローノス」です。この「妬む」という言葉は勿論、嫌な言葉です。私たちは「妬む」なんていう言葉はいやです。聖書にも「妬む」という言葉は、その意味においては勿論、いいとしていないけれども、また別な角度からこの「妬み」という言葉を聖書が使っているので困る。それをちょっと勉強しておかないと具合がわるい。

これは「妬む」という言葉ではないけれども、イザヤ書63章15節に、

「15**ねがわくは天より俯観なわし　その栄光あるきよき居所より見たまえ　なんじの熱心となんじの大能あるみわざとは今いずこにありや　なんじの切なる仁慈と憐憫とはおさえられて我にあらわれず**」（イザヤ63・15）

という。この

「なんじの熱心」

という字が「妬み」という字なんです。だから、妬みという言葉は決していわゆる妬みでないということは、それでもわかるわけです。「キヌアー」という字です。これが「妬み」とはっきり訳されている場所があります。ここのイザヤ書では「なんじの熱心」という。今日、私が「神の熱愛」と題に書いたのは、このキヌアーという字の「なんじの熱心」からきている。

「神の妬み」という言葉は有名な出エジプト記20章のモーセの十誡の中に出てくる。20章5節のところに、

「5**之を拝むべからずこれに事うべからず我エホバ汝の神は嫉む神なれば我を悪む者にむかいては父の罪を子にむくいて三四代におよぼし　6我を愛しわが誡命を守る者には恩恵をほどこして千代にいたるなり**」（出エジプト20・5～6）

「嫉む神である」

と書いてある。即ち、偶像を拝む者に対しては、神様は妬む神である。宗教的姦淫を犯す者に対して神様は妬む神である。そういう言葉が出ている。

申命記にもある。４章24節に、

「24**汝の神エホバは燬尽す火、嫉妬神なり**」（申命記４・24）

と。これははっきり書いてある。焼き尽くす火であり、妬む神であると。

申命記６章の15節にも、

「15**汝らの中にいます汝の神エホバは嫉妬神なれば恐くは汝の神エホバ汝にむかいて怒りを発し汝を地の面より滅し去りたまわん**」（申命記６・15）

なんていう恐ろしいことが書いてある。

それから、ちょっとついでに参考に読んでください。今の６章25節に、

「25**我らもしその命ぜられたるごとく此一切の誡命を我らの神エホバの前に謹**

んで守らば是われらの義となるべしと」（申命記６・25）

と書いてある。誡命を守れば義となる。パウロは事実、自分が誡命を守ったと思ったから、自分の義を主張した。パリサイですから。この言葉がまた、本当の意味において守れば義になるので、それを本当の意味において守って義になった者はキリストだけなんです。

そういうわけで、妬みの神であると同時に、それから申命記の７章９節に、

「**9汝知るべし汝の神エホバは神にましまし真実（まこと）の神にましまして之を愛しその誡命を守る者には契約を保ち恩恵をほどこして千代にいたり**」（**申命記７・９**）

「真実（まこと）の神」という言葉がそこにも出ています。この「妬み」と「真実」はやはり同義語（シノニム）で、同じことなんです。「真実」は「エメツ」といいまして、「アーメン」という字です。エメツの神、アーメンの神です。「アーメン」というのは「誠（まこと）」という字ですから。言が成るんです、「誠」という字は。「真実」というよりか、この「誠」と書いた方が簡単でいいね、一字で。言が成る。神様が言ったことが必ず成る。

誠の神である。そして、「妬み」というのはむしろ、

「熱愛の神」

熱愛と言った方がいいと思って、私はこの熱愛という言葉を使った。別にこの「熱愛」という言葉はどこにもないかも知れません。さっきの「熱心」という言葉はありますね、「なんじの熱心」という。

●極みまでの愛

神様は万象を創造された。中でも特に人というものはどれくらい深く顧みられているか。神の創造の最大の傑作でしょう。

「人を神の似像（にすがた）につくった」

と書いてあるんだから。人間は

「神の似像（にすがた）」（Ebenbild Gottes, Selem Elohim, Imago dei）

としてつくられた。ですから、ここにおいて自分の像が映っているんです。映像、似像。あの『ファウスト』の中の一番あとに、

「過ぎゆくものはなべて映像にすぎず」

とある。「Gleichnis（グライヒニス）」という。これは「映像」とも訳し、また「比喩」とも訳し、あるいは「徴（しるし）」、現われ、徴候とも訳す。神様の徴なんです、人間は。だから、キリストは、

「言い逆らいを受くる徴」

だというんです。神様は自分の似像に――なるほど花においても栄光が現われていますけれども――人間において最も神は栄光を現わし給うた。即ち似像（にすがた）として創った。人間の本質を、神様はご自分と同質なものと創造（つく）られた。

同質なものとして私たちが創られているのに、そのことを自覚しないで、神様をそっちのけになったら、それは異質になってしまう。そうしたら、異質になる。ところが、近代人、現代人というものは、みんなこれは異質になってしまっている。神様そっちのけで、「自由、自由」なんて言っている。「神の自由」が来ているのに、神の自由でない、「人間の自由」に切り換えたから、これは異質になってしまっている。同じ自由といったって、これは異質の自由です。不自由でしょうがない。本当の自由は神の自由を自由とする者が本当の自由なんです。だから、同質に創られている。そこに初めて

「映像であり、徴である」

ということがあるわけでしょ。神様はそこにおいて、極みまで愛するという。

「一匹の羊が谷底に落ちれば、谷底まで行って尋ね求める善き牧者（ひつじかい）の如くに、私はお前たちを尋ね、極みまで愛し、いや実は羊のために己の生命を棄てる」

とキリストは言われた。それは即ち、己の生命を棄ててまでも、相手を生かそうとするのが、神の愛、神の熱愛、神のジェラシー、「神の妬み」というものなんです。神の妬みというのは、なんと神聖なるものであるか。聖なるものであるか。「妬み」なんていう言葉はいけないけれども、これは非常に聖なるもの、そして、聖（きよ）らかですから、むしろ私は「白熱の愛」と言いたい。白熱の愛です。その神の白熱の愛が、

「神は我らの衷（うち）に住ませ給いし霊を、白熱の愛をもって追求し給う」

追求し、尋ねてやまないんです。どこかに隠れてしまったら、それを追求する。どこかに逸（そ）れてしまったら、それを追求して、それを呼び戻そうとするのが、この神の白熱の、極みまでの愛です。

「キリストは、世に在る己の者を愛して極みまでこれを愛したまえり」

というのがヨハネ伝の13章に出ていましたね。あの「極みまでの愛」とは非常にいい言葉ですが、それなんです。ヨハネ伝13章の始めの方、

「1過越（すぎこし）のまつりの前に、イエスこの世を去りて父に往くべき己が時の来（きた）れるを知り、世に在る己の者を愛して、極（きわみ）まで之を愛し給えり。」（ヨハネ13・1）

といって、例の「足を洗う」話が出てくる。極みまで私たちは究極まで――救極まで――追求されている。けれども、私たちは物体じゃないから、そんなに素晴らしい極みまでの愛だけれども、

「そんな愛は要りません」

という人に向かっては、キリストは暴力は使わない。どこまでも追求するけれども、暴力は使わない。相手の自由意志を尊重する。自由ですよ、そんな愛をも、

「私は受けません」

という人は、どうぞ、受けなくてもいい。その代り、

「サタンのとりこになりますよ」

というだけの話です。

私たちの魂が神様との結びつきに、ある接線もっている。極みまでの愛はどこまでも、どこまでも追求していくけれども、神様は最後の手を触れないんです。即ち、その人が本当に手を延ばせば、しっかり握手してくださる。神様は手を触れない。神様の愛は暴力でもってそいつを捕まえようとはなさらない。本当に受けるかということは、その人の魂がこんな愛にまで追求されていたということに、自由の魂が気がついて、本当に手を神に差し延べたときに、神様の方から絶対に離すことのできない手をもって、これを救い上げてくださいます。けれども、

「父よ！」

といって叫ぶことがなければ、神に呼び求めることがなければ、祈ることがなければ、神様はその人を捕まえない。暴力で捕まえようとはなさらない。神の愛と私たちの愛との、聖らかにして厳粛な関係があるわけです。

●霊魂が神に手を延ばすか延ばさないか

本当にその愛に感激して、

「ああ！　自分は間違っていた、とんでもない方向に自分の魂は向いていました」

と。横っちょを向いていたり、あるいは自分を見ていた。一生懸命で「我」というものを見ていたり、横っちょを向いていた。そのことに気がついて、

「ああ、神様、キリストよ！　私は間違っていました」

といって神の方を向くならば、もう疲れて手が出せなくても、その心の霊魂の手を神様はつかまえてくださる。霊魂の叫びを、霊魂の目を神様が見てくださるから、それで、本当に神の愛にとらえられる。どんなにサタンの力が強くても、それで沈淪してしまってどうにもならないでもう自殺の一歩手前というところでも、その時に神に霊魂が帰ったらば、これは救われる。そのことはまたヤコブ書の5章の終りの方に、

19 **わが兄弟よ、汝等のうち真理より迷う者あらんに、誰か之を引回さば、**
20 **その人は知れ、罪人をその迷える道より引回す者は、かれの霊魂を死より救い、多くの罪を掩うことを。**

今度は執成しができる。迷っている人がどうしても帰れない。執成しをしても、執成しそのものがどうっていうんじゃない。執成しはやっぱり執成しです。やっぱり最後は、その人が自ら神様の前に自ら砕けるまではダメなんです。救いは万人に確かに臨んでいながら、万人は救いに対して不確かである。何故かというと、それはその霊魂が神様に、うかうかと手を延ばさないからです。

キリストの十字架は、救いはもう来ている。復活の生命も来ている。聖霊も来ている。恩寵はあふれている。にもかかわらず、何故、多くの人は来ないんでしょうか。何故、聖

書の中に来ないんでしょうか。そこは、神様はみんなの自由を認めて、最後の一線でもって、最後の接線でもって、神様は、その霊魂が手を延ばすか、延ばさないかということだけを見ていらっしゃる。そうでなかったら、もう世の中はめでたしめでたしさ。

「神様は万能だから、全部万能だから、何故、神様は万能のくせに、こんな悪を放っておくか。万能なら悪を放っておくことはないじゃないか」

と。これは頭脳の理屈です。そうじゃないですか、神様は万能なんです。万能だけれども、万能であるということは、如何に霊魂を神の似像にしているか。即ち、神は自由なものですから、本当の自由だから、その人の本当の自由が神に即ける自由となるかどうかを、そこで最後に験されるわけです。験すというけれども、最後の一線で伏せておく。どんなに偉い人たち、先生方の話を聞いても、どんなに素晴らしい参考書を読んでも、どんな幸福な環境にいても、その人の霊魂が神に直結するまでは、キリストの前に砕かれるまでは、どんなに他の人がみんな天国に行っても、その人は入れませんよ。

「私のお父さんはこんなに立派で、私の兄さんはこんなに立派で、私の友人はこんに立派で、だから、私も天国へいきます」

なんて、どっこい、そうはいかない。また、まわりが悪人だらけで、しょうがないやつらに取り囲まれていても、その人が本当に神に直結するならば、その人は天国人です。神の民となるかならないかは、血脈によらず、環境によらず、ただその人の霊魂の如何にかかっている。

これは、預言者エゼキエルがそのことを、旧約聖書でははっきり言っている。エゼキエルは本当に個人の霊魂が如何に神に直結しなければならないか、あの非常に霊的な預言者エゼキエルがそのことを道破している。エゼキエル書というのを、皆さん、読んでごらんなさい。そこですよ、その一点です。斯くも熱愛していらっしゃる神へ直結するか。だから、イザヤ書63章でそう言っているではないですか。

「15 **ねがわくは天より俯観なわし その栄光あるきよき居所より見たまえ なんじの熱心となんじの大能あるみわざとは今いずこにありや**」（**イザヤ63・15**）

「いずこにありや」じゃないんですよ、本当は。大能ある聖業と熱心は、今でも来ているのに、この預言者はなぜ、「今いずこにありや」と言うのかというと実は、

「私たちみんなが神様から脱落しているものですから、あなたのその熱心がやって来ても、これを受けないで、『今いずこにありや』と言わなければならないような、そんな私たちのみじめな有様なんです」

という言葉なんです、反語的に。「今いずこに在りや」ではない。今でもちゃんと、いずこにも在るんです。いずこにも在るのに、「いずこに在りや」と、預言者が言わなければならないのは、

「こっち側がダメでございます」

ということなんです。とうとう64章で、

「**1願くはなんじ天を裂きてくだり給え　なんじのみまえに山々ふるい動かんことを**」（**イザヤ64・1**）

「神様、天を裂いて降ってください」

と叫んでいる。けれども、こっちが一向、「父よ、神よ」といって叫ばないから。

今のクリスチャンも叫ばない。呼ばない。詩篇は「叫び、呼ぶ」と書いてあるのに、今のクリスチャンは呼ばない。体裁の祈りばっかりしている。霊魂が奥底でもって本当に叫んでいない。だから、ダメなんです。事実が証明する。本当に霊魂が神様に手を延ばしているか。そうしたら、もうどんな環境でも、

「私は嬉しくてしょうがない。私を通して神様の栄光が現われる。ああ、なんでもよろしい」

というようなことになっていくんですよ、自分がその天国体になってくるとね。だから、

「**神は我らの衷に住ませ給いし霊を、妬むほどに慕いたもう**」

という。この「霊」というのを「聖霊」というように解釈する学者もあります。まぁそうとってもいい。しかし、この場合はそうでないでしょう。しかし、結局はそういうことになってくる。私たちの霊魂にキリストが来ている、そのキリストの霊が来ているその霊がいよいよもって愛すべき霊ですから。本当にもう聖霊となってしまっていればもう大丈夫なんです、本当に聖霊の内住の事態になってくれれば。

「大丈夫だ」って言ったって、ただ安心することではないですよ。聖霊の内住ということになってくれれば、いよいよそうならざるを得なくなるから大丈夫なんです。客観的に大丈夫だというんじゃない。

聖書に『神は我らの衷に住ませ給いし霊を、妬むほどに慕いたもう』と云えるを虚しきことと汝ら思うか。6神は更に大なる恩恵を賜う。

わけです。

●キリストが神の熱愛の具体的な現われ

そこでまだまだ私はもう少し旧約の方を引きたい。ヨブ記の32章8節に、

「**8但し人の衷には霊あり**

「霊」というのは「ルーアッハ」です。

全能者の気息人に聰明を与う」（**ヨブ32・8**）

また、33章4節、

「**4神の霊われを造り　全能者の気息われを活かしむ**」（**ヨブ33・4**）

26節、

「**26かれ若し神に祷らば神かれを顧りみ　彼をしてその御面を喜び見ることを得**

せしめたまわん」（ヨブ33・26）

これは神の霊における祈りの事態。28節、

「28**神わが魂霊を贖いて墓に下らしめず わが生命光明を見ん」（ヨブ33・8）**

34章14節、

「14**神もしその心を己にのみ用い その霊と気息とを己に収回したまわば 15もろもろの血肉ことごとく亡び人も亦塵にかえるべし」（ヨブ34・14）**

神様が与えている霊を、もし神様が取り返してしまったら、みんなダメになってしまう。

「神様はそのように、霊と気息とを与えているんだよ」

ということですよ。だから、もう神の霊が私たちからとられたら、おしまいですよ。それがお留守になったらおしまい。私たちの霊魂は神の霊にふれて、アウグスティヌスが、

「我々の心は神に憩うまでは平安を得ず」

というのはどういうことかというと、

「我々の霊が神の霊に触れるまでは、平安を得ない」

というのと同じことです。そういうようにできているんだから。

磁石は磁鉄が磁極に向かって吸いつけられるように、北極を指すようにできている。北極を指すようにできているのに、そいつが狂ってしまった。みんなが、人間という磁鉄が狂ってしまっている。狂ってしまっているんですから、

「さぁ、北極はどこだろう?」

なんてことになって、それだもんだから、全てがおかしなことになる。

「しかし、神の熱愛とはどうなんでしょうか?」

なんて言っては困るですよ。神の熱愛はいずこに現われたか。イエス・キリストにおいて現われた。キリストが即ち、神の熱愛の具体的な現われです。神様の熱愛、妬みというものは、キリストにおいて現われた。徹底的に現われたんです。

そして、とうとうキリストは己の生命を棄て、私たちを贖いとって――私たちは遂に神に直結できないような惨憺たる事態でしょうが――だから、それを直結せしめるところの媒介となって、さっき言ったこの接線のところにキリストが立っているんです。この接線にキリストの十字架が立って、私たちの手を神様の手に繋いでくださる。延ばした手は本当に神につかまえられる。

その捕まえられる神から来たところの手は、誰の手かと思ったら、キリストの手さ。キリストの手ですよ。神様の手は、即ちキリストの手であった。それが即ち私たちがつかまえた手なんです。キリストという手が、キリストというこの神の手が、これが即ち神の熱愛の、火の玉の如きものであり、

「我、火を投ぜんために」

という、キリストは即ち自らが火である。

「石叫ばん」

という彼自身が石である。そうですよ。聖書はそういうように読めて来なければ読めない。本当の力にならないんです、バラバラの概念のただ詮索をしてたのでは。

エゼキエル書の５章13節。普通は余り読まないところですね、エゼキエルなんてのは。しかし、このエゼキエルは大事なところです。

「13斯我怒りを洩し尽しわが憤を彼らの上にこうむらせて心を安んぜん 我わが憤を彼らの上に洩し尽す時は彼ら我エホバの熱心をもてかたりたる事をしるに至らん」（エゼキエル５・13）

この「エホバの熱心」というのが今の「妬み」という言葉と同じなんです。彼らの不信に対する神の審きがこの熱心として現われる。しかしながら、神様は審かんがために審いているんじゃない。これは救い上げるための審きなんですから。そこは間違えないように。まだエゼキエルの16章38節、42節、23章25節、35章11節なんてところに、同じく出ている。

ゼカリヤ書にも非常に著しいことがありましたね。ゼカリヤ書１章14節に、

「14かくて我と語う天の使 我に言いけるは汝呼ばわりて言え 万軍のエホバかく言いたもう我エルサレムのためシオンのために甚だしく心を熱して嫉妬おもい」（ゼカリヤ１・14）

なんて書いてある。「心を熱して嫉妬おもい」とたたみかけて書いてある。イスラエルの我に対する、これも熱愛の事態なんです。それから同じくゼカリヤ書８章２節に、

「2万軍のエホバかく言いたもう我シオンのために甚だしく心を熱して妬く思い大なる忿怒を起こして之がために妬く思う」（ゼカリヤ８・２）

なんて、そんな言い方をしている。

●絶信の信

ヤコブ書にかえりまして、

6神は更に大なる恩恵を賜う。されば言う『神は高ぶる者を拒ぎ、へりくだる者に恩恵を与え給う』と。7この故に汝ら神に服え、悪魔に立ち向かえ、

「神に服え」という。神様に従うといったって、自分が自分で神に従うなんていうんじゃないですね。やっぱり神の愛によって、神の熱愛によって、上から来てますから、これは従わざるを得ないわけです。神様に直結してますから、直結というのはキリストによってだから、その時には、どんなにサタンの勢力がどうであろうとも、恐れることはない。サタンに立ち向かえるんです。自分が、

「私の信仰でサタンに立ち向かおう」

なんていったって、これはダメですよ。神の力、キリストの力によって力にあれば、サタンに立ち向かえる。そういう意味においては、本当に深く祈りのうちにキリストが立って

いる限りなんにも恐ろしいことはない。なんにもこわいことはない。キリストに在る限り、何ものもこわくない。どんな霊的な、どんなこんなって言ったって、そんなものはこわくない。いいですか。本当にキリストに在ること。観念ではダメですよ。

「深くキリストに在る」

ということです。

さらば彼なんじらを逃げ去らん。

本当に幼な児の如き、幼児のごとき信頼。ああ、内村先生の面白い言葉があったね、

「信仰は信頼である。故に、自分自身に対する不信頼でなければならない。しかし、自分の信仰それ自身に対する不信頼でなければならぬ」

なんていう言葉が内村先生の言葉の中にある。信仰は信頼だから、自分自身に対する不信頼、

「自分なんてものをあてにしているんじゃない。いや、自分の信仰すらも、そんなものはあてにならないんだ」

と。さすがに内村先生ですよ。如何なる人も信仰を私していたら、その信仰もあてにならん。

「キリスト・イエスがわが一切である」

ということが即ち信である。もういつも申し上げている通り、絶信の信というのはそのことだ。即ち、自分の信仰に絶するところに本当の信がある。それが本当の信仰。自分を信仰するのは信仰じゃない。キリストの義、キリストの愛、キリストの信――この前も愛・信・望の構造を申し上げましたね――あの通りです。だから、そうしたらば、なんにもおそろしいことはない。

8 **神に近づけ、さらば神なんじらに近づき給わん。**

いや実は、神様が近づいているから、天国は既に近い。

「天国は近づきたり、汝ら悔改めて福音を信ぜよ」

天国は近づきたりと。キリストが、自分が天国である。

「自分が天国だから、天国は既に来たんだ。だから、私に直結しなさい」

と。なんでもないです。むずかしいことはない。神は近づいて来ていらっしゃるんです、詩篇139篇にある通り。何処に至ろうとも、神はそこに居られる。だから、近づいてごらん。そうしたら、神様は近づき給わんというのは、

「神様が近づいておられる。だから、お前たち近づけ」

と、むしろ逆に言いたいくらいです。

「神、汝らに近づきてあり給う。故に汝ら近づけ。汝ら近づけ、さらば神なんじらに近づき給わん」

と。勿論、祈りにあって、キリストのもとにですね。

罪人（つみびと）よ、手を浄（きよ）めよ、二心（ふたごころ）の者よ、心を潔（いさぎ）よくせよ。9 **なんじら悩め、悲しめ、泣け、なんじらの笑いを悲歎（かなしみ）に、なんじらの歓喜（よろこび）を憂いに易（か）えよ。**

神なき笑い、神なき歓喜は何になるか。それよりも、

「まず神なきことに悲しみなさい。そうしたらば、本当の歓喜に変えるぞ」

と、そういう意味ですよ、勿論。

●無は即ち無限

10主の前に己を卑うせよ、然らば主なんじらを高うし給わん。

11兄弟よ、互に謗るな。兄弟を謗る者、兄弟を審く者は、

あのマタイ伝7章の始めのところと同じです。審いてはいかんと。マタイ伝7章のところをちょっと引っ張りますか、新しい方もいらっしゃるから、ちょっと言っておきます。

「1なんじら人を審くな、審かれざらん為なり。2己がさばく審判にて己もさばかれ、己がはかる量にて己も量らるべし。3何ゆえ兄弟の目にある塵を見て、おのが目にある梁木を認めぬか。4視よ、おのが目に梁木のあるに、いかで兄弟にむかいて、汝の目より塵をとり除かせよと言い得んや。5偽善者よ、まず己が目より梁木をとり除け、さらば明かに見えて、兄弟の目より塵を取りのぞき得ん。」（マタイ7・1～5）

「梁木」とは何ですか。自分の目の中の梁というのは、「己を義とする」ことが梁木です。

「自分を善しとし、己を正しいと思っている」

のが、梁木なんです。それが偽善者なんです。それがパリサイなんです。それをとり除きなさいと。

だから、私がいつも申し上げている「無」ですよ。無というのは虚無ではない。いいですか。無は虚無ではない。自分を本当にむなしくしている心は、ただ空白な無念無想とか何とかいうのではない。無念無想なんてやっていたら、サタンがきますよ。自分を無としているところには、キリストが無限となってくるこの角度でなくてはいかん。

「無は即ち無限である」

と私が言うのは、キリストの無限がそこに充満してこなければダメです。

「キリストの無限が充満してくる」

とは、

「無的である」

ということは、同時にキリストにおける

「霊的である」

ということですよ。間違っては困るですよ。無と霊とはそこで同じなんです。己が無となるところには、キリストという霊が入ってくるんです。そうでなくて、いわゆる無念無想なんかやってたら、サタンが来ますよ。

「ああ、いいな。これは空き巣があった」

てなわけで、やって来ますよ。そんな空き巣になってはダメです。自分が無です。自分は無だけれども、キリストが無限に充満してくださるというこの角度です。だから、

「己が目にある梁木（うつばり）」

即ち「己」という梁木、己を義とするこの梁木をとり除いて、無色透明になりなさい。そうしたら、キリストの光が光りますよ、キリストの光が。キリストの光でもって一切が見えてくるから、相手の小さな塵が見えて、

「お前、塵があるじゃないか」

なんて責めない。それはパリサイです。

「さぁその塵を取ってあげましょう。ゴミを取ってあげましょう」

という、相手の悩み苦しみをとってあげるという、そっちの角度の愛になるんです。そうでなくて、

「あいつはどうだ、これはどうだ」

なんて相手を比較して批判したら、そんなのはダメです。それは己を義としているから、己の梁木があるから。梁木はとりなさい。らくーうになるから。

光は即ち霊であり、霊は即ち愛である。キリストの光というのは、相手を照らして、審いている光ではない。相手を幸いな光の中に入れてしまう光、愛の光です。だから、

「審くなかれ」

という。人を審くなと。

「いや困りましたね、どうやって審かないことになりましょうか」

なんて、苦しむ必要はない。そうでなくて、どこまでもキリストの中に入っていくと、審きは愛に変わるんです。「勿（なか）れ」といってただそれを防いだってダメですよ、プラスのものが入ってこなければ。人間というものは、プラスのものが、神様のプラスのものが入ってこなければ、どうにもならない。

「どうすべし、すべからず」

なんて、それ自体を百年言ってみたところで、どうにもならない。神様の、キリストの生命が入ってきて、この溢れる生命となり、光となり、愛となってこなければ、どうにもならない。そうしてきたらば、もう誡命（いましめ）はみんなわかる。

「誡命は、ああ苦しいな、そんなに誡命がたくさんあっては、やり切れないな」

なんて、普通の誡命だったらそうですよ。

「ああいくら誡命があってもいい。根本の鍵を、泉を、源泉を掴（つか）まえているから」

と。泉を、本当の鍵をつかまえる。だから、これは愛泉という。「愛泉」というのはいい言葉です。愛の泉です。自分でもって、

これ律法を誹（おきて）り、律法を審くなり。汝もし律法を審かば、律法をおこなう者にあらずして審判（さばきびと）人なり。

審判人は神様だけです。

12 **立法者また審判者は唯一人にして、救うことをも滅ぼすことをも為し得るなり。**

それは神様ばかりで、お前は一体、

なんじ誰なれば隣を審くか。

とんでもない話だよと。

13 **聴け『われら今日もしくは明日それがしの町に往きて、一年の間かしこに留り、売買して利を得ん』と言う者よ、**

何かここで具体的なことがあったと見えますが、

14 **汝らは明日のことを知らず、汝らの生命は何ぞ、暫く現れて遂に消ゆる霧なり。**

「霧」という言葉は面白い言葉です。「アトゥミス」という言葉で、ドイツ語で「アートメン」(atmen)「呼吸する」という言葉がこの「アトゥミス」という言葉で、霧、息、蒸気、湯気という意。それで、「暫く現れて遂に消ゆる霧」や息みたいなものだと。

15 **汝等その言うところに易えて『主の御意ならば、我ら活きて此のこと、或は彼のことを為さん』と言うべきなり。**

この「主の御意ならば」と、ここで特にヤコブがこうやって戒めているものだから、キリスト教会で何かというとすぐ、

「御意ならば、行きますよ」

なんて言って、すぐ付け加えるです、「み意ならば」といって。そんなもの、ただ付け加えたってダメですよ。本当に「御意ならば」というときは、自分がその中に投じて、祈って、本当に御意を受けとるような角度にならないで、「御意ならば」なんてただ仮定法みたいに使ったってダメです。

16 **されど今なんじらは高ぶりて誇る、斯くのごとき誇はみな悪しきなり。**17 **人善を行うことを知りて、之を行わぬは罪なり。**

●祈りが聴かれたあとの実存が大事

1 **聴け、富める者よ、なんじらの上に来らんとする艱難のために泣きさけべ。**

これは特に富める者がいたと見えまして、そして如何にそれがこうであるかと――まぁそこはいいです――けれども、

「富んでいるということが悪い」

と、いきなり悪いと思ってはいかん。そこは間違えないように。

「なんでも貧しいことがいい」

なんて、そういうわけではない。実は、富めるも貧しきもない。皆さん、私たちはみな本当は貧しいのさ。もし、富があるならば、大いに富を蓄えてください。大いに金持ちになってください。しかし、その金を私してはいけません。それをどしどし善用してください。本当に兄弟姉妹のために、また世の困っている人のために、あるいは本当の事業のために。アメリカの富豪がなぜいいことをするか。やっぱり彼らは信仰の世界が伝統的にあるから。日本の金持がなぜ、いいことができないか。やっぱり、富を、財を神のものとして考えることができないから。

そういうわけで、マンモンに、富に仕えたら勿論ダメ。富だって、健康だって、何だってそうですよ、学問だって。それに囚われたらダメ。芸術だって何だってそうです。それにとらえられて、それの奴隷になったらダメです、それを支配していなければ。それを支配する魂になっていなければ。支配することは如何にしてできるか。人間がなぜ、富を偶像にしないでいくことができるか。富というやつは一番、偶像になるやつです。これを何故、偶像にしないでいくことができるか。その魂が神の所有となっていればできる。

「12**我は卑賤における道を知り、富における道を知る。また飽くことにも、飢うることにも、富むことにも、乏しき事にも、一切の秘訣を得たり。**」（ピリピ4・12）

とパウロがピリピ書で言っているではないですか。

「我一切の秘訣を得たり」

と。即ち、自分がどんな環境におろうとも、自分を本当に

「無者」

として自覚しているから、神様を一切、キリストを一切として自覚しているから、神の栄光、キリストの栄光のために、全てのものは使われていく。だから、そのものが皆、祝福されていきます。

2**汝らの財は朽ち、汝らの衣は蠹み、3汝らの金銀は錆びたり。この錆なんじらに対いて証をなし、かつ火のごとく汝らの肉を蝕わん。汝等この末の世に在りてなお財を蓄えたり。4視よ、汝等がその畑を刈り入れたる労動人に払わざりし値は叫び、その刈りし者の呼声は万軍の主の耳に入れり。5汝らは地にて奢り楽しみ、屠らるる日に在りて尚おのが心を飽かせり。6汝らは正しき者を罪に定め、且これを殺せり、彼は汝らに抵抗することなし。**

7**兄弟よ、主の来り給うまで耐え忍べ。**

世の終末を目前にしての使徒たちの言葉です。キリスト、パウロ、ヨハネ、ヤコブもみんな、間近に神の国を待ち望んでいた。その神の国は、20世紀の今日、いよいよ質的に近づいてきた。その事が強まってきている。

「今の政治家が悪い」

なんて言います。悪いではない。もし、その政治家たちが狂えば、本当の叫びをあげて、

「世界の宗教家は何をしているか」

なんて、そんなことはダメですよ。自分たちに、自分に言いたい。

「私たち信仰のある者がなぜ、この世界の危機を食い止め得ないか」

と、私たちは自分自身に言わなければならない。世の終末は近い。

視よ、農夫は地の貴き実を、前と後との雨を得るまで耐え忍びて待つなり。

8 **汝らも耐え忍べ、なんじらの心を堅うせよ。主の来り給うこと近づきたればなり。**

「主の来り給うこと近づきたればなり」と。だから、耐え忍んで、どんなことも耐え忍ぶ。ヨブの忍耐のように。

9 **兄弟よ、互に怨言をいうな、恐らくは審かれん。視よ、審判主、門の前に立ちたもう。**

10 **兄弟よ、主の名によりて語りし預言者たちを苦難と耐忍との模範とせよ。**

11 **視よ、我らは忍ぶ者を幸福なりと思う。なんじらヨブの忍耐を聞けり、主の彼に成し給いし果を見たり、即ち主は慈悲ふかく、かつ憐憫あるものなり。**

と。神に即ける者は神の栄光と勝利が来るということにおいて耐え忍べる。「耐え忍ぶ」ということは、ただやせ我慢をして耐え忍ぶのではない。私たちは耐え忍び得る。何故、耐え忍び得るか。神の栄光と勝利が確かであるから、耐え忍び得るのです。そうでなかったらば、耐え忍び得ない。得てみたところで、それはやせ我慢である。

12 **わが兄弟よ、何事よりも先づ誓うな、**

これも、キリストのマタイ伝の5章にあります。「誓う」ということは自分が本当に責任をとれないことです。他に転嫁するような意味です。

或は天、あるいは地、あるいは其の他のものを指して誓うな。只なんじら然りは然り否は否とせよ、罪に定められる事なからん為なり。

責任をもって然りは然りと言え、責任をもって否は否と言えと。「然り」とか、「否」とか言えるということは、人格の自由が本当にそこに立つということです。神に、キリストについて然りと言い、キリストに在って闇の世界、不正なことに対して否と言う。

13 **汝等のうち苦しむ者あるか、その人、祈せよ。喜ぶ者あるか、その人、讃美せよ。**

14 **汝等のうち病める者あるか、その人、教会の長老たちを招け。彼らは主の名により其の人に油をぬりて祈るべし。**

15 **さらば信仰の祈は病める者を救わん、主かれを起こし給わん、もし罪を犯しし事あらば赦されん。**

16 **この故に互に罪を言い表し、かつ癒されんために相互に祈れ、正しき人の祈ははたらきて大なる力あり。**

17 **エリヤは我らと同じ情をもてる人なるに、雨降らざることを切に祈りしかば、三年六ヶ月のあいだ地に雨降らざりき。**

18 **かくて再び祈りたれば、天雨を降らし、地その果(み)を生ぜり。**
19 **わが兄弟よ、汝等のうち真理より迷う者あらんに、誰か之を引回(ひきかえ)さば、**
20 **その人は知れ、罪人(つみびと)をその迷える道より引回(ひきかえ)す者は、かれの霊魂(たましい)を死より救い、多くの罪を掩(おお)うことを。**

祈りが御霊の祈りであって、その時には互いに執成し、癒されることでも、あるいはどんな願いでも必ず聴かれる。しかしながら、その聴かれるということは、どこまでも神の御意を求めての祈りであって、御利益の、自分の利益を求めるような祈りはダメである。そして、祈りが聴かれたあとの実存が大事であるというわけです。

●ヤコブ書の総括

それで今日は終りますけれども、ヤコブ書はこれで一応おしまいと致しますが、ちょっと、簡単に総括(くく)りしておきましょう。

当時、信仰が観念(あたま)の信仰になっている面が既にあった。ヤコブはそれに対して、

「行為に現われないような信仰は空しい」

と言った。けれども私たちは、そのヤコブの精神は二段構えにとってはいけない。信行一如である。即ち、

「信ずるという事態、それ自体が即ち行為である、内的行為である」

ということを言いました。神を、キリストを信じ受けとるということは、自分を投げ出して、キリストを信じ受けとる。キリストに即ち自己を全托するわけです。全托する、我無く、キリストに自己を全托するという、この無我全托という事態は即ち、そういった信が本当の信で、それが即ち行なんです。根本的、内的行であるから、外的行為はそれから派生してくる。

内的に水分を受けとり、太陽の光を受けとれば、花が咲くという外的行為が派生してくる。自然現象を見たってそうじゃないですか。本当に水分を内側に持って、光を内側に浸透させないで、どうして花が咲くか。即ち、内的行為が起きているから、外的行為の花が咲くという、内的行為が現われているんです。

我々だって同じことですよ。霊魂(たましい)の中に本当にキリストの生命(いのち)が動き出さなくて、キリストの霊が、息吹(いぶき)が通わなくて、どうして行が出てくるか。そうでないような観念信仰から行為がとりすまして出てきても、そんな行為は偽りです。なるほど人には良さそうに、立派そうに見えても、力はない、生命はない。そういう意味において、信行一如だということは、案外、これが気がついていないんです。

そういった意味における信は即ち行である。けれども、人間は罪びとだから、外的行為がしばしば相即(そうそく)してこない。相即してこないけれども、いい。そんなことを苦にすることはない。どこまでも問題はこの信をすっかり本ものにしていくこと。これを本ものにして

いけば、それはもう花が、本ものの花が咲く。これをいい加減にして、いくら造り花を作ってみたって、それはダメだよと。こういうことなんです。

それでは生命にならない。どんなに立派な造り花が片一方にあっても、もう片一方にはどんなに虫が喰って惨憺たる花でも、これは生命が通っている花です。虫が喰っていても、花びらが落っこちても、こっちは生命がある。片一方は立派でまことに間然するところなきような花であっても、そっちは生命はない。それは、いい加減な信仰と行為とをいい加減に結びつけている世界で、いわゆる立派そうに見えても、もう片一方は本当の生命が来て、キリストがわが霊魂の中に生きている。その惨憺たる花のような私は、躓いたり滑ったり転んだり倒れたりしますけれども、しかし、

「私の中のこのキリストの生命をどうしてくれるか」

というのが、この信行一如の世界です。

私たちは、パウロの「信仰のみ」と、ヤコブの「行為による」と言っているのを、そこでピタリ一つにしてつかまえなくては。このパウロが聖霊からものを言い、ヤコブが聖霊からものを言っている限り、一つであります。表現は違っても一つです。

そのつかまえ方ができないものだから、いつまでたっても、この聖書が生きてこないという始末です。それが、ヤコブの一番の、私たちがヤコブを読む鍵だと思う。そうしたところに、本当に自由の律法というものが展開して、「全き律法」「自由の律法」とヤコブが言わなければならなかったような事態が出てくる。

「25**されど全き律法、すなわち自由の律法を懇ろに見て離れぬ者は、業を行う者にして、聞きて忘るる者にあらず、その行為によりて幸福ならん。**」（ヤコブ1・25）

ということが、ヤコブ書1章の終りの方に出ていたね。それは1章、2章で結局、ヤコブはそのことを畳みかけて言っている。

そして3章で、この間やった「舌」の問題が、言葉の問題が出て来たでしょ。

「6**舌は火なり、不義の世界なり、舌は我らの肢体の中にて、全身を汚し、また地獄より燃え出でて一生の車輪を燃やすものなり。**」（ヤコブ3・6）

この舌は今度は、言葉の世界です。3章で言のことを言っている。1章、2章で信行のことを言って、今度は言のことを言っている。その言は結局、

「11**泉は同じ穴より甘き水と苦き水とを出さんや。**」（ヤコブ3・11）

問題は泉、心の泉、心泉というもの。あるいは霊泉と言ったですな、私は。霊泉、霊の泉、心の泉が本当にキリストという泉、源泉に泉している泉であるならば、その言は本当に人を祝福していくところの言葉に変わっていく。

争い、憎しみ、党派心というようなことは、みんな消えていく。この言葉は、

「**太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき**」

という。この心泉が心泉であるならば、その言と同質の言葉になると、この言葉は今度は、神様の言がかかって来ますから、

「**エホバの言、わが裡にありて火の燃ゆるが如くなれば、忍ぶにつかれて堪え難し**」

という。この言葉が、

「**わが言は霊なり、生命なり**」

という言葉に、私たちの言葉は、質が同質になっていく。

そして、今日の４章、５章へ行って、神様の熱愛が霊魂にかかって来ている。この霊魂の一番根源はこの４章のところです。即ち、神の熱愛がかかって来て、神の熱愛によって、私たちの霊魂がとらえられるまでは、とことんまでも追求して止まない。極みまでも愛するところの神の愛に向かって、

「ああ、神よ、キリストよ！」

と言って叫んで、わが霊魂の手を伸ばせば、神様の愛が、この生命が通ってこの言も展開していきます。４章５節のここがその実は鍵なんです、

「**神は我らの衷に住ませ給いし霊を妬むほどに慕いたもう**」

と。そして、深く祈りなさい。そういう事態になって来たらば、お互いに本当に祈りをもって執成しなさい。それは必ず聴かれていきます、この事態から祈っていけば。神の祝福のための祈りですから、何でも大胆に祈りなさい。自分の御利益の祈りでない、神様の栄光の現われの祈りとなっていきます。そうしたらば、聴かれていきます。

皆さんは今日こうやって礼拝をしながら、何かしらんけれども、全身に澎湃としてキリストの生命が通って来ていなければ、本当に聴いていないですよ。通っているならば、あなた方は本当に聴いている。事実が自らを審いていきます。

そういうわけで、ヤコブ書が私たちに親しくなったと思います。

来週はペンテコステですから、この間、使徒行伝を清瀬〔東京療養所〕でお話したから、今度は２章、ペンテコステのところをお話します。午前10時から夜の８時頃までぶっ続けて集会をします。まぁところどころ、それは切りますけどね、疲れた人は寝たって、どうだっていいですよ。10時から集会、２時間位、聖書のお話。それからご飯を食べて、少し休んで感話懇親会を少しくやって、終りに祈祷会と、こういうことにしたいと思っておりますから、そのお積もりで是非、さそって来てください。

それから、その次からペテロ前書に入ります。６月は全部休みなしにぶっ通してやりますから。１回、２回、３回、４回、５回と。そして６月一杯で〔集会は〕おしまいということになりますので、どうぞ、よろしく。それじゃ。

●祈り

天のお父様。キリストの兄弟ヤコブの書翰を、まことにお粗末ではありますが、しかし、心を込め、霊魂を込めて、共に学ぶことができ、感謝いたします。

私たちは、聖書を学ぶ毎に、聖書が親しくなり、いよいよ熟読玩味、この中に身を投じ、聖書の言葉が私たちに生命となり、光となり、愛となり、智慧となり、力となります。聖書は、本当に飲みまた喰らう書であって、理解する書でないことを、いよいよ身にしみて、感謝いたします。

どうか、聖書を書かしめられた預言者また使徒たちの如く、私たちも神様に如何に極みまで愛されているかにいよいよ気がつき、イエス・キリストの愛の生命に歓喜する霊魂、喜びの霊魂となり、如何なるものも本当に喜びに変えていくような存在といよいよさせてくださるように願い奉ります。

兄弟姉妹たちと共にこのようにして、ヤコブを学び、感謝いたします。どうかまた、来るべきペンテコステ、いよいよ一週間の祈りを深め、そして、使徒たちのキリスト教会の歴史が始まったこの重大な事態に対し、私たちもまた、新しく20世紀のただ中をまた一歩を突き出だし、突進していくことができますように、御助けくださらんことを願い奉ります。これは繰返しでもなく、また読み返しでもなく、まことに神様、前進であらんことを願い奉ります。

お父様、この兄弟姉妹たちの中にいよいよ、聖書が化体しつつあることを感謝いたします。貴神の栄光が現われ、どうか、一人ひとりの勉強にしろ、また事業にしろ、何にしろ、神様、これを貴神（なんじ）の所有（もの）とし、そして祝福し給わんことを切に願い奉ります。我々の一生の目的ははっきり決まりました。貴神（あなた）の栄光を現わさんこと、ただこれだけであります。

お父様、本当に「一切の秘訣を得たり」という霊魂に、パウロと偕になり、ヨハネと偕に深くキリストの愛の中に入り、包まれまして進むことができますように、また感謝いたします。また、希望（のぞみ）ます。同じく志を持っているクリスチャンたちの中に、どうか、このサタン的な勢力に対して、安住の光を持って、世を天国に変える勇敢なクリスチャンがいよいよ現われていくことができますように願い奉ります。

水爆、原爆のこのただ中の現実にあって、我々日本人が何をもって世界に訴え、何をもって世界に本当に貢献すべきであるか。ただ、この福音の一点にかかっています。日本人の霊魂がこの福音を真に身に体することなくして、どうしても、私たちの歴史的使命を果たすことができません。どうか、その意味において、新しく霊魂の気がついた者たちが左顧右眄することなく、この道をまっしぐらに進むことができますように。……